



齋藤茂吉著

# 新選秀歌百首

白玉書房刊

# 新選秀歌百首

昭和二十四年三月廿五日 印刷  
昭和二十四年三月三十日 發行

定價二百五十圓

著 者 齋 藤 茂 吉  
サイ トウ モ キチ

發 行 者 鎌 田 敬 止  
東京 都 大田區 調布 壺町一ノ二三四

印 刷 者 塚 田 十 五 郎  
東京 都 千代田區 神田 神保町二ノ三

發 行 所 白 玉 書 房  
シラ タマ ショ ベウ

三都 京 大田區 調布 壺町一ノ二三四  
會 員 番 號 A二二ナ 三五七

## 自序

この新選秀歌百首は、昭和八年一月號の雜誌改造のために執筆したものであつた。はじめは、小倉百人一首の例に倣つて、古いより現代に至るまでの歌から一人一首の秀歌百首選を作る意圖であつたところが、實際當つてみるにそれは面倒不可能であるから、古事記・萬葉・古今・新古今から自分の好む歌を抜抄し、新古今から一足飛びに賀茂真淵に至り、徳川時代を経て明治に及び、明治も新派和歌運動に参加した數家の歌にとどめてそれ以後は省略してしまつたものである。そして是非抜かねばならぬ歌人の歌をも抜かずにしまつた不滿の

ことは本文中に見えてゐるとほりである。それでも大體短歌の變遷と、短歌に對する愚見の一端を示し得たやうな氣がするのである。一首一首の評釋は頁數の關係上筆者の力の能ふかぎり簡單に書いて見た。從つて參考書を涉獵していろいろ文獻を明記することはなし得なかつたのである。このあわただしき執筆から成つた百首選を改造文庫に收めるにあたつて、それらの不備を改良するのが順序ともふが、さういふ機會にさういふ要約のもとに出來た文章も何かの特色があらうと思ふので、一二の誤を訂し、若干の増補をしただけにしてそのまま記念のために取つて置かうともふのである。

# 目次

## 自序

## 新選秀歌百首

|   |                    |    |
|---|--------------------|----|
| 一 | 狹井川よ雲立ちわたり（伊須氣余理姫） | 一六 |
| 二 | さねさし相模の小野に（弟橘姫）    | 一八 |
| 三 | ちばの葛野を見れば（應神天皇）    | 二〇 |
| 四 | 道のしり木幡をとめは（大鷦鷯命）   | 二三 |
| 五 | やまとべに西風ふきあげて（黒姫）   | 二四 |
| 六 | たまきはる宇智の大野に（中皇命）   | 二六 |
| 七 | 山越しの風を時じみ（軍王）      | 二八 |
| 八 | 焚田津に船乗せむと（額田王）     | 三〇 |

|    |                      |    |
|----|----------------------|----|
| 九  | わたつみの豊旗雲に（中大兄）       | 三三 |
| 一〇 | 三輪山をしかも隠すか（額田王）      | 三四 |
| 二  | 春過ぎて夏きたるらし（持統天皇）     | 三五 |
| 三  | 英虞の浦に船乗すらむ（柿本人麿）     | 三八 |
| 三  | わが背子は何處ゆくらむ（當麻眞人麿の妻） | 四〇 |
| 四  | ひむがしの野にかぎろひの（柿本人麿）   | 四三 |
| 五  | 秋の田の穂のへに霧らふ（磐姫皇后）    | 四四 |
| 六  | 天の原ふりさけ見れば（倭姫）       | 四六 |
| 七  | 鴨山の磐根し纏ける（柿本人麿）      | 四八 |
| 八  | あまざかる夷の長道ゆ（柿本人麿）     | 五〇 |
| 九  | もののふの八十氏河の（柿本人麿）     | 五二 |
| 一〇 | 田子の浦ゆうちいでて見れば（山部赤人）  | 五四 |
| 三  | 憶良らは今は罷らむ（山上憶良）      | 五六 |

|    |                   |   |
|----|-------------------|---|
| 三  | 吉野なる夏實の川の（湯原王）    | 六 |
| 三  | ももづたふ磐余の池に（大津皇子）  | 六 |
| 四  | 世の中は空しきものと（大伴旅人）  | 三 |
| 五  | ひさかたの天道は遠し（山上憶良）  | 四 |
| 六  | よのなかを變しと恥しと（山上憶良） | 六 |
| 七  | 山高みしらゆふ花に（笠金村）    | 六 |
| 八  | 若の浦に潮みちくれば（山部赤人）  | 七 |
| 九  | み吉野の象山の間の（山部赤人）   | 五 |
| 一〇 | 御民われ生ける驗あり（海犬養岡麿） | 四 |
| 一一 | あしびきの山河の瀬の（人麿歌集）  | 六 |
| 一二 | いにしへにありけむ人も（人麿歌集） | 八 |
| 一三 | 大海に島もあらなくに（讀人不知）  | 九 |
| 一四 | 春日山おして照らせる（讀人不知）  | 八 |



|    |                   |   |
|----|-------------------|---|
| 壹  | 宇治河を船わたせをと（讀人不知）  | 八 |
| 貳  | わが背子を何處行かめと（讀人不知） | 三 |
| 参  | ゆふされば小倉の山に（舒明天皇）  | 四 |
| 四  | いはばしる垂水のうへの（志貴皇子） | 六 |
| 五  | 沫雪のほどもほどもに（大伴旅人）  | 八 |
| 六  | 御食むかふ南淵山の（人麿歌集）   | 九 |
| 七  | ひさかたの天の香具山（人麿歌集）  | 三 |
| 八  | 秋萩の枝もとををに（讀人不知）   | 四 |
| 九  | 逢坂をうちいでて見れば（讀人不知） | 六 |
| 十  | 夏麻ひく海上潟の（上總國の歌）   | 八 |
| 十一 | 筑波嶺に雪かも降らる（常陸國の歌） | 〇 |
| 十二 | 下毛野安蘇の河原よ（下野國の歌）  | 〇 |
| 十三 | わが宿のいささ群竹（大伴家持）   | 四 |

|   |                    |     |
|---|--------------------|-----|
| 四 | うらうらに照れる春日に（大伴家持）  | 二〇六 |
| 四 | ひなぐもり碓日の坂を（防人）     | 二〇八 |
| 五 | 大きな海の水底ふかく（石川女郎）   | 二一〇 |
| 五 | 春日野の若菜つみにや（貫之）     | 二二三 |
| 五 | 春日野は今日はな焼きそ（読人不知）  | 二二六 |
| 五 | をちこちのたづきも知らぬ（読人不知） | 二二八 |
| 五 | ひさかたの光のどけき（紀友則）    | 二三〇 |
| 五 | 白雲に羽うちかはし（読人不知）    | 二三三 |
| 五 | 蛸の鳴きつるなべに（読人不知）    | 二三四 |
| 五 | 佐保山のははその色は（坂上是則）   | 二二六 |
| 五 | み吉野の山のしら雪（坂上是則）    | 二二八 |
| 五 | すがる鳴く秋の萩原（読人不知）    | 二三〇 |
| 六 | むすぶ手のしづくに濁る（貫之）    | 二三三 |

- 六 山櫻かすみの間より（貫之）……………一四三
- 空 近江より朝立ちくれば（讀人不知）……………一三五
- 空 水莖の岡のやかたに（讀人不知）……………一三八
- 空 まがねふく吉備の中山（讀人不知）……………一四〇
- 空 最上川のぼればくだる（讀人不知）……………一四二
- 空 甲斐が根をさやにも見しが（讀人不知）……………一四四
- 空 奈吳の海の霞のまより（後徳大寺左大臣）……………一四六
- 空 むかし思ふ草の庵の（皇太后宮大夫倭成）……………一四八
- 空 夕立の雲もとまらぬ（式子内親王）……………一五〇
- 空 さびしさはその色としも（寂蓮法師）……………一五二
- 七 大江山かたぶく月の（前大僧正慈圓）……………一五四
- 七 神無月かぜに紅葉の（藤原高光）……………一五六
- 七 神無月木々のこの葉は（前大僧正覺忠）……………一五八

|   |                     |     |     |
|---|---------------------|-----|-----|
| 高 | ほのぼのと有明の月の（源信明朝臣）   | ……… | 一六〇 |
| 五 | 月すめばよもの浮雲（藤原秀能）     | ……… | 一六三 |
| 其 | 古畑のそはの立木に（西行法師）     | ……… | 一六四 |
| 老 | 天の原あかねさし出づる（菅贈太政大臣） | ……… | 一六六 |
| 大 | 曉のゆふつけ鳥ぞ（式子内親王）     | ……… | 一六八 |
| 元 | あしひきの山下水に（能因法師）     | ……… | 一七〇 |
| 八 | 阿耨多羅三藐三菩提の（傳教大師）    | ……… | 一七三 |
| 八 | おしなべて空しき空と（前大僧正慈圓）  | ……… | 一七四 |
| 三 | 道のべの螢ばかりを（寂然法師）     | ……… | 一七六 |
| 三 | 鴉鳥のかつしか早稲の（賀茂真淵）    | ……… | 一七八 |
| 四 | さざなみの比良の山べに（田安宗武）   | ……… | 一八〇 |
| 五 | あまのはら吹きすさみたる（楳取魚彦）  | ……… | 一八三 |
| 六 | もみち葉を尋ねていれば（小澤蘆庵）   | ……… | 一八四 |

|    |                    |       |     |
|----|--------------------|-------|-----|
| 八七 | 秋風のさむきゆふべに（香川景樹）   | ..... | 一八六 |
| 八八 | 月讀のひかりを待ちて（僧良寛）    | ..... | 一八八 |
| 八九 | 上山は山かぜ寒し（平賀元義）     | ..... | 一九〇 |
| 九〇 | これのみやけふはありつる（大隈言道） | ..... | 一九三 |
| 九一 | たのしみは草のいほりの（橘曙覧）   | ..... | 一九四 |
| 九二 | すみだがは中洲をこゆる（井上文雄）  | ..... | 一九六 |
| 九三 | 鳥がねにおきいで行けば（八田知紀）  | ..... | 一九八 |
| 九四 | すがのねの長き春日の（高崎正風）   | ..... | 二〇〇 |
| 九五 | わがために水波む妹が（小出繁）    | ..... | 二〇三 |
| 九六 | ちちのみの父に似たりと（僧愚庵）   | ..... | 二〇四 |
| 九七 | 我が墓を訪ひこむ人は（落合直文）   | ..... | 二〇六 |
| 九八 | 若松の芽だちの緑（正岡子規）     | ..... | 二〇八 |
| 九九 | 幼きは幼きどちの（佐佐木信綱）    | ..... | 二一〇 |

|                  |    |
|------------------|----|
| そや理想こや運命の（與謝野鐵幹） | 二二 |
|------------------|----|

附錄 正岡子規の歌二十首

|             |    |
|-------------|----|
| 榛の木に鴉芽を嚼む   | 二八 |
| 吉原の太鼓きこえて   | 三〇 |
| 上野山ゆふ越えくれば  | 三三 |
| くれないの二尺のびたる | 三四 |
| 病みふせるわが枕邊に  | 三六 |
| 山吹は散り菜の花は   | 三八 |
| 松の葉の細き葉ごとに  | 三〇 |
| 庭中の松の葉に置く   | 三三 |
| ガラス戸の外は月あかし | 三四 |

|                  |    |
|------------------|----|
| 血を吐きし病の床の……………   | 三六 |
| すがのねの永き一日を……………  | 三八 |
| 瓶にさす藤の花房……………    | 三九 |
| いちはつの花咲きいでて…………… | 四〇 |
| 世の中はつねなきものと…………… | 四一 |
| 夕顔の棚つくらんと……………   | 四二 |
| 歌の會ひらかんと思ふ……………  | 四三 |
| 下り行く末の世にして……………  | 四四 |
| 龍岡に家居る人は……………    | 四五 |
| 市に住めば水の患あり……………  | 四六 |
| まくらべに友なき時は……………  | 四七 |

附録の二 正岡子規の歌十首

|                  |     |
|------------------|-----|
| 寒山も豊干も虎も……………    | 二六四 |
| 橋東に柳のおほき……………    | 二六六 |
| 森の木にくふや蔦の巢……………  | 二六八 |
| 是たたば北インヂヤの……………  | 二七〇 |
| 我せこの君はものゝふ……………  | 二七一 |
| さりながら君ひとり行け…………… | 二七三 |
| 木のもとに臥せる佛を……………  | 二七四 |
| 十四日お晝すぎより……………   | 二七六 |
| 水莖のふりにし筆の……………   | 二七八 |
| 我庵の硯の箱に……………     | 二八〇 |



後

記

.....  
三三